



Title	ブラジル人就労者における日本語の動詞習得の実態 : 自然習得から学習へ
Author(s)	ナカミズ, エレン
Citation	阪大日本語研究. 1998, 10, p. 83-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジル人就労者における 日本語の動詞習得の実態 －自然習得から学習へ－

On the Use of Verbs in Japanese Language by
Brazilian Guest Workers
－from Natural Acquisition to Formal Learning－

エレン・ナカミズ

Ellen NAKAMIZU

キーワード：自然習得、正式な学習、動詞の脱落、動詞形式・テンス

1. 研究の対象と目的

ブラジル人就労者の大部分が日系人であるにもかかわらず、ブラジル社会への同化が進んできたことを原因に、日本語能力の高い人は予想されるほど多くない。また、来日以前日本語と日本文化になんらかの形でさらされた人の中では、受動的な話者が最も多く見られる(ナカミズ1996)。要するに、聴解能力はある程度あるが、会話能力は低いということである。来日後は、主に職場でのインプットにより、自然習得が行われるが、近年のボランティアによる日本語教室の増加に伴い、そこで学習するブラジル人が増えている。以下、対象とするインフォーマントは、職場である程度自然習得した時点でボランティアの日本語教室で学習しはじめたブラジル人である。このような言語環境の下で日本語を習得した彼らの動詞の習得および使用における諸特徴を浮き彫りにしたい。

世界の多くの言語では、時の表し方が動詞のテンス・アスペクトや副詞の使用によって文法化されている。日本語もその言語の1つである。第1

言語であろうと、第2言語であろうと、それらの言語を習得する際どのような順序で習得の過程が進んでいくか、話者はどのような形式を使用し時間を表すか、使用された形式にはそれに相当する機能の習得が伴うかなどの問題は興味深いテーマであり、実際には第2言語としての日本語においてその研究領域で成果を上げている研究は少なくないが、教室内のみの学習を取り上げたものがほとんどである。

本稿ではブラジル人話者における動詞の習得・使用を2つの観点から捉えたい。1つは、横断的な観点である。場面ごとに見られる傾向、要するに職場場面とボランティア場面によって使用される動詞形式に偏りがあるか否かを調べることである。もう1つは、インフォーマントの習得過程を縦断的に捉え、ボランティア場面からのインプットが多くなり、また同様の場面においての学習を続けるにつれて、習得過程には変化が見られるかどうか、見られるとすれば、それはどのように表面化するかを明らかにすることである。

2. 先行研究と問題点の所在

本稿で注目点となっている「自然習得」と「正式な学習」の相違点は、動詞の使用状況を通じて窺い知ることができるのではないかと思う。ここでは、関連文献を2つ挙げてみたい。1つは、Schumann(1987)である。Schumannは、第2言語話者が習得の初期からある段階までは文脈に頼り、文法形式より語用論的なストラテジーを多く使用することが見られるという。Schumann(1987)は、次のように指摘する。

temporal reference can be made by adverbials (now, tomorrow, always, prepositional phrases), serialization (the fixing of a temporal reference point and allowing the sequence of utterances to reflect the actual temporal order of reported events), calendric reference (dates, days of the week, months, and numbers), and implicit reference (temporal reference inferred from a particular

context or situation).

対象とされるインフォーマントは様々な言語的な背景を持ちながら、受け入れ先の言語を習得した際、もちろん個人差があったにも関わらず、著しく同じような傾向を見せた。また、言語的な背景という要素だけではなく、習得しようとする目標言語が異なっているにもかかわらず、習得過程には共通点が見られた。

もう1つは、「形式」(form)と「機能」(function)の習得について考察したKlein(1993)である。この研究は、英語、ドイツ語、フランス語、それぞれの言語を自然習得した移住者による、テンポラリティを現す方法の習得過程を明らかにしようとした。その結果から述べると、目標言語が異なるとはいえ、それぞれの言語の習得過程に共通点が多く見られた。その中で、機能より形式が先に習得されること(form precedes function)がいずれのインフォーマントのデータにも観察された。例えば、英語において、習得のある段階では、テンスとアスペクトを表す形態素(V₀ and Ving, V₀ and past tense, past tense and present perfect tense)の併用が見られたが、機能の区別はなかったという。

教室で体系的に教わった学習者は、ある文法形式とともにその文法形式が包含する概念及び機能をひとまとまりとして習得することが普通であろう。一方、第二言語を自然習得する際、習得される言語形式と同時に必ずしもその形式が働く機能が認識されるとは限らない。自然習得の場合、話者は置かれた状況から判断し、限られた言語能力でその状況に応じようとするが、学習とは異なり、教科書と教師からの指示や訂正がなく、ほぼ周囲のインプットからのみ第二言語の体系を帰納的に組み立てていく。やがて、習得は「形式」>「機能」という順で進む傾向が見られるわけである。

ブラジル人における日本語の習得過程には以上の文献が指摘している特徴をいずれも見つけだすことができる。このように、言語を問わず、第2言語習得の過程には普遍的な要素が存在しているということが言えるのである。

3. 分析の進め方

「職場内」と「職場外」の場面に分け、定期的にそれぞれの場面における、ブラジル人話者(BI, BA, BM)と日本人話者との自由会話の録音文字化資料を分析のデータとした。会話では過去の出来事が話題にされ、非過去に位置づけられる話題は比較的少なかった。

来日後同様な条件の下で日本語のインプットが行われてきた3名のインフォーマントを選出し、それぞれの習得過程を追究した。BIとBAは、来日後の自然習得とともに、ボランティアの日本語教室での学習が録音の第一回目の時点で数ヶ月間にわたっていた。BMは、同じ日本語教室で学習しはじめたところで調査を実施したが、その後、BMが日本語教室に通えなくなったので、学習は中断された。

さらに、ここでは、以上の3名のインフォーマントにおけるデータと対比するために、調査者が予備調査の段階で録音した、一切学習せずに日本語を自然習得したBN話者の会話も補充データとして併せる。BNは非日系の40才の男性であり、滞日期間が4年間にもなっている。来日後大阪市内の工場で働いており、BMと同様に、職場以外の場で日本語を使用することがほとんどない。ただし、BNはBMと異なり、来日以前日本語のインプットが全くなく、自然習得が完全に来日以降に行われた。

表1：ブラジル人話者の属性

	性別	年齢	父	母	学歴	滞在期間	居住地	母語話者との付き合い	
								職場内	職場外
BI	男	33	準一世	二世	大学卒	1年8ヶ月	滋賀県栗東町	上司・同僚	ボランティア
BA	男	24	非日系	準一世	大学中退	4年9ヶ月	滋賀県栗東町	上司・同僚	ボランティア
BM	男	25	二世	二世	高校中退	5年	滋賀県甲西町	上司・同僚	同僚
BN	男	40	非日系	非日系	高校卒	4年	大阪市	上司・同僚	—

日本語母語話者の属性は次の通りである。

表 2：日本語母語話者の属性

	性別	年齢	出身地	育ち	居住地	ブラジル人との関係
J H	男	40代	滋賀県	滋賀県	滋賀県栗東町	班長
J C	男	20代	滋賀県	滋賀県	滋賀県栗東町	同僚
J D	男	40代	滋賀県	滋賀県	滋賀県甲西町	同僚
J O	女	30代	福岡県	福岡県	滋賀県草津市	ボランティア
J Y	男	37歳	愛知県	滋賀県	滋賀県草津市	ボランティア
J K	女	21歳	滋賀県	滋賀県	滋賀県草津市	ボランティア
J T	男	48歳	東京都	東京都	大阪府箕面市	初対面

まず、次のような点を中心に、分析を進めたいと思う。第1に、第2言語話者の談話には動詞が出現すべき文脈の中で出現するかどうか、第2に、出現するとすれば、使用される動詞の形式を全面的に見わたした上で、文脈によって形式と機能との関係がどうなっているかの2点である。

3.1. 動詞の出現

本節では、3名のインフォーマントが使用した動詞の形式に焦点を当てるが、まずその形式の出現・非出現を調べる必要があるであろう。そこで、動詞が出現する文脈を、義務的な文脈と、任意的な文脈に分けることとする。前者は動詞が欠かせない要素となっている環境であり、後者は動詞が出現し得る環境ではあるが、必ずしも出現しなければならないわけではない。

まず、動詞出現が義務的な文脈だと判定した基準は次のような場合である。

(I) 動詞が脱落すると、発話の意味が曖昧になる場合。

(1) [ボ BA-JK]

JK: 日本、厳しいですね。働きすぎと（はい）よく（はい）言われ

ますね。

BA: だから、今いい生活がφ、な。

(II) 動詞の脱落によって、文が不自然になる場合。直接話法や引用の文脈で用いられる「という」のような伝達動詞の脱落がこのケースに当てはまると思われる。

(2) [ボ BI-JO(1) 友達が日本語教室に行くように誘う]

BI: (...) で、来週の、その、その時、来週に (ん) あの、「一緒に行きましょうか」φ、「あ、僕は行きましょうか」φ、それからずっと

(III) 構文に支障がある場合。第2言語話者における中間言語の統語構造がまだ発達していないために見られる脱落である。この場合、話者は「名詞並列型」の文を生産することにとどまる。なお、動詞だけではなく、助詞も脱落することが頻繁に見られる。

(3) [ボ BM-JY(2)]

E (調査者): あ、おじいさんとおばあさんに=会ったこと=

BM: =おじ=、おじいちゃん、おばあさん、今、ブラジルφ [おじいさんとおばあさんは今ブラジルにいる]

JY: (笑) なんや、すれちがってるやつね (ああ、はあ) [笑いながら] せっかくMさん日本にいるのにな。

動詞出現が任意的だと思われた文脈は次のような基準に基づく。

(i) 話し手自身、もしくは話し相手の直前の発話によって、当該の発話の意味が明確になった場合、動詞を省略することが多い。特に、対話場面では、母語話者同士でも珍しいことではない。こうした場合は、動詞が脱落しても、発話の意味が充分理解でき、むしろその方が自然かつ経済的だと思われるのであろう。

(4) [ボ BI-JY]

BI: コンピューターの基盤つくります。

JY: はい。あつ、コンピューターの基盤。

BI: 全部 φ。(はい) コンピューター (はい)、テレビ (はい)、ビデオ φ。

(5) [職 BI-JC(1)]

JC: 毎日シャンプーしてる+

BI: 毎日 φ

(ii) 名詞文、形容詞文における助動詞「だ・です」、いわゆるcopulaの脱落。このような脱落は母語話者の発話にも頻繁に見られる。

(6) [職 BI-JC(1)]

JC: Kちゃん、ちょっと苦しい、ちゃうかなあ。

BI: 苦しい φ+

JC: うん。

(7) [ボ BA-JY]

BA: でも、[交通ルール]厳しい方が安全 φね。(…)やっぱりブラジルは、あの、道に、あの、左方向で走って=るでしょ=(はい=はい) 日本は右 φ。

上の項目のうち、義務文脈の(I)、(II)、(III)について、次節で詳しく述べることにする。まず、表3～表5では、各インフォーマントの発話に見られた動詞の出現率を場面ごとまた調査段階ごとに明示する。なお、動詞が出現しなかった場合は「φ」で示す。

表 3 : BI 動詞の出現・非出現

場面	動詞			NP・AP+Copula					V+Copula	伝達動詞		Copulaタ形			合計
	出	φ		出			φ		出	出	φ	ダッタ	デシタ	φ	
		任	義	ダ	デス	ヤ	任	義							
ボBI-JO(1)	83	8	4	—	8	—	33	—	4	—	7	—	—	—	147
ボBI-JY	101	13	3	—	33	—	15	—	6	—	—	—	—	—	171
職BI-JC(1)	26	1	—	—	1	—	21	—	—	—	1	—	—	—	50
ボBI-JO(2)	86	11	3	—	14	—	23	—	—	7	4	6	1	2	157
職BI-JC(2)	38	5	—	1	3	—	35	—	1	—	3	—	1	—	87
合計	334	38	10	1	59	—	127	—	11	7	15	6	2	2	612

表 4 : BA 動詞の出現・非出現

場面	動詞			NP・AP+Copula					V+Copula	伝達動詞			Copulaタ形			合計
	出	φ		出			φ		出	出	φ	ダッタ	デシタ	φ		
		任	義	ダ	デス	ヤ	任	義								
ボBA-JK	86	—	5	1	12	—	45	—	3	—	—	—	—	—	152	
職BA-JH	41	—	—	2	—	—	22	—	—	—	—	—	—	—	65	
ボBA-JY	111	15	7	1	1	2	61	—	4	2	4	—	—	—	208	
職BA-JC	82	11	2	2	4	—	54	—	4	—	—	—	—	—	159	
合計	320	26	14	6	17	2	182	—	11	2	4	—	—	—	584	

表 5 : BM 動詞の出現・非出現

場面	動詞			NP・AP+Copula					V+Copula	伝達動詞		Copulaタ形			合計
	出	φ		出			φ		出	出	φ	ダッタ	デシタ	φ	
		任	義	タ	デス	ヤ	任	義							
ボBM-JY(1)	45	11	6	—	—	—	16	—	—	—	—	—	—	—	78
職BM-JD(1)	68	1	4	—	—	—	7	—	—	2	—	—	—	—	82
ボBM-JY(2)	54	16	5	1	3	—	15	—	—	—	—	—	—	—	94
ボBM-JT	49	16	17	1	1	—	30	—	—	—	—	—	—	—	114
職BM-JD(2)	108	4	3	1	—	1	28	2	—	—	—	—	—	—	147
合計	324	48	35	3	4	1	96	2	—	2	—	—	—	—	515

3.1.1. 曖昧さを生む動詞の脱落とその原因

上述の(I)は次のような2原因が動詞の脱落に直接関与していることがわかった。1つ目は動詞の未習得であり、2つ目は動詞を思い出さないこ

とである。後者は母語話者の発話にも見られる現象である。語彙をすぐに思い出さなかったり、適切な表現を思いつかない理由で、発話を完成させないことがしばしばあるであろう。非母語話者の場合は、どちらかが原因になるかが判断しにくい、いずれの原因にせよ、話者の発話は非文法的にはならない。ただし、語彙が不十分なため、意味が曖昧になっている。

(8) [ボ BI-JO(1)どのようなきっかけで日本語教室に通いはじめたかという質問への答え]

BI: 「行くかなあ、行くかなあ」、で、6ヶ月φ

(9) [ボ BM-JT]

JT: 店+

BM: うん、店 (=ああ、店=) いろんなものをφ=

文脈から推測すると、(8)では、BIはこの位置に「日本語教室に通うようになるまで6ヶ月過ぎた」とう意味で、「過ぎた」という動詞を使用するつもりでいただろうが、「過ぎた」以外の動詞が絶対用いられないとは断定できない。(9)では、BMは「ブラジルで持っていたお店はいろいろなものを売っていた」、つまり「売る」という動詞を用いるはずであった。

(10) [ボ [BA-JY]

JY: そう、そう。で、そこ、駐車場なか、いつも入れない (ああ)
そうすると、あのー、わざ、=わざ=

BA: =バイク=はどこでもφ (笑)

JY: そう、そう、あの、=プラザ= (=うん=) まで行ってね、車、
うん、止めてこないといけ=ないし= (=うん=)。うん。

BA: バイクはどこでもφ

BAの場合、同じ発話の同じ環境で2回も動詞の脱落が見られる。ここでの脱落は単に語彙を思い出さなかったことに原因があるかも知れないが、

動詞の不使用は形式の未習得による可能性も推測される。要するに、コンテキストから言うと、「止める」の可能形「止められる」が予想できるが、BAがここで発話を完成させなかったのは可能形を習得していないからであると考えられる。当該の発話を含め、BAのデータには可能形がまったく見られないと言うわけではないが、出現した可能形はすべて五段活用動詞にあたるものである。「止める」のような一段活用動詞の可能形は見あたらない。

3.1.2. 伝達動詞の脱落 — 伝達表現の習得

話し手自身や第3者の発話を話し相手に伝える場合には、直接話法と間接話法のどちらかを用いる。直接話法を用いると、引用に伴う「と言う、と聞く」など、「と」が前接されるいわゆる伝達動詞が使用される。

ブラジル人話者の談話におけるこうした伝達動詞の脱落にも注目したい。

ブラジル人話者の発話に見られる伝達動詞の脱落は伝達の表現力と深くかかわっていると思われる。以下、その習得順を追っていきたい。なお、出来事を伝達する文脈がBIとBAの談話にのみ見られたので、2名のデータから用例を取り上げる。

BIのデータを調べると、伝達動詞の脱落が特に録音調査の第1回目に多く見られた。

(11) [ボ BI-JO(1) 例(1)]

BI: で、Aは僕に、あの、僕、言ったね、最初から。(ん、ん、ん)
 あの、「日本語学校ありますか」。「あ、僕は日本語学校に」φ。
 「どこの」、「あ、僕と一緒に行きましょうな」φ (ん、ん、ん)
 で、それから、その話から、「行くかな、行くかな、行くかな」
 で、6ヶ月 [笑]

JO: そうよね。そんな初めからいなかったものね。

例(11)では、φ印で示している位置に伝達動詞が入るべきだと思われ

る。BIは自分とかかわりのある過去の出来事を伝える場合、登場人物の発言を直接引用の形でそのまま再現する語用論的な手段を用いる。発言の引用を動詞でつなぐことが見られない。

他に、次のような例もあった。

(12) [ボ BI-JO(1)]

JO: でも、そう言ってたよ。

BI: 違うよ。

JO: Bはやかましい。

BI: めずらしいよ、それ。めずらしい。誰も聞いたら、Pやかましいよ ϕ 。[聞いてみたら、だれでもPがやかましいというよ]

上の例(12)では、話し手は自分自身が参加した出来事を語るのではなく、他人が一般的に言うある情報を話し相手に伝えているが、ここでも「という」の使用は見られない。このように、調査の第1回目には、伝達動詞がすべての文脈で脱落した。

8ヶ月後行った録音調査の最後の段階にも以上の例(13)と例(14)と同様の文脈が再びBIとJOとの会話に見られた。この段階においても、出来事を語る文脈ではまだ伝達動詞が出現しなかった。

(13) [ボ BI-JO(2)]

BI: (...) 注文して、あと、あの「Uさん、僕知ってるか、誰」 ϕ
「ああ、知ってる、あああ、もう、一緒に食事しましょう。友達
いるから」 ϕ 「はい、しましょう」 ϕ 。いろいろ話しました。

一方、第3者が言った情報を話し相手に伝える文脈では、2つのパターンが見られた。1つは、情報内容の後に「と」が伴わない「いう」動詞の使用、もう1つは「と」が伴う「いう」か「いう」が省略された「と」のみのどちらかの使用である。

(14) [職 BI-JO(2)]

BI: あるφゆった。友達。(…)会社の友達がタコベルがありますφゆった。
た。[「あります」と「ゆった」の間にポーズがない]

(15) [ボ BI-JO(2): 地震について]

BI: その人が、それは (x x) ていってるの。皆、偉い人、賢い人。
prevision, prevision.

JO: あっ、ん、予言+

(中略)

BI: あ、の、神戸の地震、もっと大きい。[神戸の地震よりもっと大きな地震]

JO: えっ、どこに+

BI: たぶんね、東京って (中略) 東京はすごい危ないって

以上の例で見られるように、「φφ→φいう→と(いう)」の順で伝達動詞の習得が進んでいるようであるが、この段階では3つの変項とも出現し、まだ揺れが見られる。さらに、自分と直接かかわった出来事や事象について語る文脈であるか、第3者が言った情報を伝える文脈であるかによって、使用する変項が異なる。前者は、「φφ」が用いられ、後者は「φいう」または「と(いう)」が用いられる傾向が見られた。全体的に言えば、伝達動詞の出現頻度が増えつつあり、BIの日本語の文構造がより複雑化しているということが言えるのだろう。

BAのデータを分析したところ、録音調査の最後の段階(BA-JY)にのみ伝達情報が出現する文脈があった。BIと同様に伝達動詞の非出現と出現との揺れが見られた。ただし、BIとは異なり、BAのデータには2つの変項「φ」と「と(いう)」のみが使用された。「と(いう)」が使用されたいずれの場合も、「いう」が省略された「って」形式として用いられている。

(16) [ボ BA-JY]

BA: (...)右、左、確認して下さい=とか=(うん=)左、右はだめて。

3.1.3. 「名詞並列型」文

話者は動詞形式そのものを習得していても、中間言語の統語構造がまだ発達していないため動詞が出現せず、「名詞並列型」文を生産することにとどめることがある。これは自然習得の初期における最も典型的な特徴の1つとみなされ、中間言語が目標に近づいていくにつれ、このような構造が見られなくなる。本稿の対象となっている3名のブラジル人話者のうち、BMの談話にのみこの特徴が残存しており、この点において彼の言語体系は化石化していると考えられる。

(17) [ボ BM-JY(1)]

JY: ああ、弁当買うね。弁当買うっていゆって、あの、朝から、朝、
昼、晩とある。さん、三食あるでしょ、食事は。

BM: あ、夜だけ。[夜だけにお弁当を買う]

JY: ああ、夜だけ。ほんと、で、えっ、朝と昼は+

BM: お昼、会社[お昼は、会社で食べる]

JY: うん、ああ。

BM: 朝、パン。[朝は、パンを食べる]

この傾向は会話録音の次の段階まで残り続け、BMの動詞使用には際立つ変化が見られなかった。

(18) [ボ BM-JY(2) 最初の録音から8ヶ月後]

JY: お酒飲めない人は+どうすんの。

BM: いや、ジュース [ジュースを飲む]

JY: ジュース。ジュース飲む。(笑)

(19) [ボ BM-JT 最初の録音から8ヶ月後]

JKe: ああ、そうですか。ブラジルでは働いてたんですか。

BM: 店、ブラジル。[ブラジルでは、お店をやっていました]

(19') ブラジルでは働いてたんですか。
述語（テイタ形が過去の事柄を指していることを明示する）
店、ブラジル
（場所）副詞的な補語

これまでの例でわかるように、こうした「名詞並列型」文は完全に文脈に依存しており、文脈から文の意味が推測できるのである。そこで、語用論的な観点から述べると、最低限の情報しか含んでいないこのような発話は話し相手が求めている「新情報」のみを伝える。統語的には構文が成立していないが、コミュニケーションには支障を来すことが少ないと言えるであろう。(21)のように、付いてくるはずの動詞がすでに話し相手の発話に出現した場合があるので、BMの発話に再びその動詞が現れなくても、意味が充分に通じる。BMの発話にしばしば見られたこの特徴は第1言語習得過程にも観察できるという(Givón, 1985)。Givónによると、談話には「pragmatic mode」と「syntactic mode」が存在しており、言語習得

過程においては、「pragmatic mode」が「syntactic mode」に先立ち、習得が発達するにつれ、syntactic modeに入れ替えていくことになる。そして、それぞれのモードには次のような特徴があると述べている。

pragmatic mode	syntactic mode
(a) 主題・命題構造	主語・述語構造
(b) loose coordination	tight subordination

例(3)、(17)、(19)で見られるように、BMが話し相手の質問に現れた主題を繰り返しており、「新情報」を命題として提供する。この説明に従って、(3)、(17)、(19)を分解するとすれば、次のようになる。

(17') ああ、夜だけ。ほんと、で、えっ、朝と昼は +
主題

お昼 + 会社
主題〈旧情報〉 命題〈新情報〉

(3'') おじいちゃんとおばあさん + 今ブラジル
主題 命題
〈新情報〉

(19') ブラジルでは + 働いてたんですか。
主題 述語
店 + ブラジル
〈新情報〉 〈旧情報〉
命題？

3.2. ブラジル人話者が使用した動詞の形式と機能

前節では動詞が脱落した文脈について論じたが、今度は動詞が出現した場合、どのような形式が使用されているか、またテンスを表すそれらの形

式はいかに用いられているかなどを考察したいと思う。

本稿での対象となるブラジル人話者は非過去・過去を軸としてテンスを表す形態素をほぼ習得していると思われる。しかし、前節で述べたBMの場合と同様に、それぞれの中間言語体系が均質なものではなく、さらに個人差が多く見られ、初期の特徴が残存している場合もある。

以下、ボランティア場面からのインプット期間の長さ場面差を念頭に置きながら、各話者の動詞形態素の習得および使用状況を詳細に論じる。

3.2.1. 場面ごとの動詞使用 — 動詞形式の分布

非過去・過去に分け、場面ごとに、また段階的に使用された動詞形態素を次の表6～11に示す。以下、各インフォーマントの動詞使用におけるいくつかの特徴を個別的に述べていくこととする。

表 6 : BI 場面ごとにおける動詞形式使用 (非過去形)

場面	非過去	φ	だ	です	んだ (のだ)	んです (のです)	ます	ない+φ	ないです	ないのです	ません	へん	合計
ボ	BI-JO(1)	21	—	1	—	—	18	10	3	—	1	—	54
ボ	BI-JY	15	—	1	—	—	39	5	4	—	4	—	68
職	BI-JC(1)	8	—	—	—	—	6	3	—	—	—	1	18
ボ	BI-JO(2)	23	—	—	—	—	14	8	1	—	3	—	49
職	BI-JC(2)	22	—	—	—	1	7	2	1	—	8	—	41
	合計	89	—	2	—	1	84	28	9	—	16	1	230

表 7 : BA 場面ごとにおける動詞形式の使用 (非過去形)

場面	非過去	φ	だ	です	んだ (のだ)	んです (のです)	ます	ない+φ	ないです	ないのです	ません	へん	合計
ボ	BA-JK	21	1	—	—	—	13	13	4	—	5	—	57
職	BA-JH	13	—	—	—	—	1	6	—	—	—	2	22
ボ	BA-JY	22	—	—	—	3	4	15	1	—	—	—	45
職	BA-JC	25	1	—	—	3	1	7	—	—	2	—	39
	合計	81	2	—	—	6	19	41	5	—	7	2	163

表 8 : BM 場面ごとにおける動詞形式の使用 (非過去形)

場面	非過去	φ	だ	です	んだ (のだ)	んです (のです)	ます	ない+φ	ないです	ないのです	ません	へん	合計
ボ	BM-JY(1)	10	—	—	—	—	4	10	—	—	1	—	25
ボ	BM-JD(1)	25	—	—	—	—	3	15	—	—	—	—	43
職	BM-JY(2)	15	1	—	—	—	5	11	—	—	1	—	33
ボ	BM-JT	20	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	31
職	BM-JD(2)	50	—	—	—	—	—	25	—	—	—	1	76
	合計	120	1	—	—	—	13	71	—	—	2	1	208

表9：BI 場面ごとにおける動詞形式の使用（過去形）

場面	過去	た＋φ	たのだ	たのです	ました	なかった＋φ	なかったです	なかったのです	ませんでした	合計
ボ	BI-JO(1)	8	—	—	4	1	—	—	—	13
ボ	BI-JY	4	—	—	4	1	—	—	1	10
職	BI-JC(1)	8	—	—	2	—	—	—	—	10
ボ	BI-JO(2)	8	1	—	12	4	—	—	—	25
職	BI-JC(2)	1	—	—	—	1	—	—	—	2
	合計	29	1	—	22	7	—	—	1	60

表10：BA 場面ごとにおける動詞形式の使用（過去形）

場面	過去	た＋φ	たのだ	たのです	ました	なかった＋φ	なかったです	なかったのです	ませんでした	合計
ボ	BA-JK	10	—	—	6	—	—	—	—	16
職	BA-JH	1	—	—	—	—	—	—	—	1
ボ	BA-JY	12	—	—	—	2	—	—	—	14
職	BA-JC	5	—	1	1	—	—	—	—	7
	合計	28	—	1	7	2	—	—	—	38

表11：BM 場面ごとにおける動詞形式の使用（過去形）

場面	過去	た＋φ	たのだ	たのです	ました	なかった＋φ	なかったです	なかったのです	ませんでした	合計
ボ	BM-JY(1)	8	—	—	—	—	—	—	—	8
職	BM-JD(1)	3	—	—	—	—	—	—	—	3
	BM-JY(2)	9	—	—	—	—	—	—	—	9
ボ	BM-JT	10	—	—	1	—	—	—	—	11
職	BM-JD(2)	10	—	—	—	—	—	—	—	10
	合計	40	—	—	1	—	—	—	—	41

3.2.2. 非過去における「普通体」・「丁寧体」の使用

いずれの会話においても肯定形が出現し得る文脈が最も多く見られた。その中で、まず普通体の「V基本形 + ϕ 」形式と「V連用形 + ます」形式に焦点を当てたい。

「自然習得」から「正式な学習」への順で日本語と接してきた対象のブラジル人話者にとっては普通体の「V + ϕ 」が基本形式であると思われる。表6～11のデータがそれを裏付けているのである。3名のブラジル人話者は職場で日本語をインプットする時間が最も長く、さらにそのインプットには普通体が際立つ。しかし、BIとBAの場合は、ボランティア場面における「V連用形 + ます」の使用頻度が高く、その形式は「職場内」の一对一のインフォーマルな会話でも見られた。それは、ボランティアの日本語教室において、「V連用形 + ます」のインプットや生産が多くなることに起因すると考えられるであろう。

BIとBAに注目すると、場面によって、「V基本形 + ϕ 」と「V連用形 + ます」の使い分けが窺われる。例えば、同じボランティア場面でも話し相手によって「V連用形 + ます」の割合が増加し、またBAは、「職場内」場面と、「職場外」場면을境界線に、「V基本形 + ϕ 」と「V連用形 + ます」を切り替えているようである。

一方、BIとBAと比べ、1ヶ月間の短い学習期間のBMは、いずれの場面でも普通体が圧倒的に多く、出現した丁寧体（V連用形 + ます）には切り替えの意識が潜在していないようである。

図1：BI 動詞における「普通体」・「丁寧体」- 場面ごとの分布

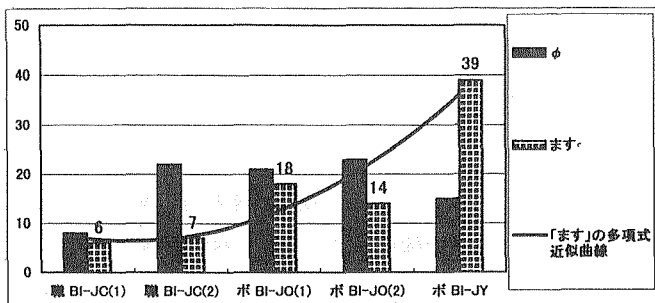


図2：BA 動詞における「普通体」・「丁寧体」- 場面ごとの分布

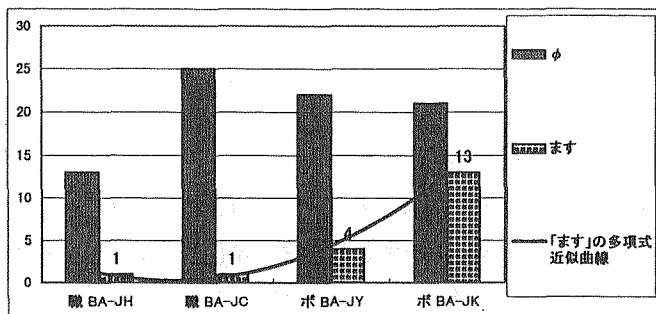
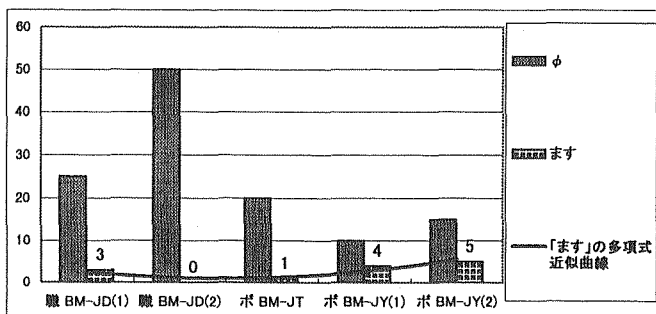


図3：BM 動詞における「普通体」・「丁寧体」- 場面ごとの分布



否定形に関しては、次のような結果が得られた。否定形が出現し得る文脈では、「V未然形ナイ + ϕ 」形式がいずれの場面、またいずれの段階でも最も多く使用された。BIとBAの場合は、「V連用形 + ません」形式が特にボランティア場面で見られた。なお、話しことばでよく使用される「V未然形ナイ + 助動詞デス」が最初の録音段階でしばしば現れ、「V連用形 + ません」より出現頻度が高かった。以下、例をあげながら、インフォーマントごとにデータを分析してみたい。

ブラジル人話者にとっては、肯定形の「V基本形 + ϕ 」と同様に「V未然形ナイ + ϕ 」が基本形となっている形式である。しかし、肯定形が出現した文脈では「V連用形 + ます」が多く使用された一方、その形式に対応する否定形の「V連用形 + ません」の出現頻度は比較的に低いものであった。要因としては、母語話者からの「V ナイ + 助動詞デス」のインプットが多いため、その形式が優先されたことが考えられる。

BIとBAいずれも「V連用形 + ません」を主にボランティア場面で使用したので、普通体である「Vナイ + ϕ 」とのスタイルの差を意識しているとも言える。一方、BMは肯定形の場合と同様に、ここでもこうした意識を示さなかった。

BIの第1段階の会話(BI-JO(1))において、「V連用形 + ません」が出現したのは「わかりません」という形式のみであり、しかも1回きりであった。「V未然形ナイ + の(ん) + 助動詞デス」の中間形式と思われる「Vナイ + 助動詞デス」は4回使用されたが、その4回のうちの2回は「けど」が後接した。

(34) [BI-JO(1) ボ]

BI: あのね、(ん) あの、僕たちの先生はいないですけども

(35) [BI-JO(1) ボ]

BI: (中略)普通の人_はあまりなあ、よくしゃべらないですけど、(ん=ん、ん=) =わかりませ=んなあ。(ボランティア場面)

「V未然形ナイ + 助動詞デス」は次の段階(BI-JY)でも使用されているが、この段階から「V連用形 + ません」形式が増えてくる。第3段階のBI-JO(2)の会話では、「Vナイ + です」が減少するが「V連用形 + ません」は増えない。基本形の「V + ϕ」が最も多く用いられる形式である。

BAのデータでは、最初の録音段階、ボランティア場面のBA-JKのみに両形式が多く見られ、それ以降の段階ではほとんど「V未然形ナイ + ϕ」のみが使用された。なお、いずれの用例でも「の (ん)」が脱落している。

最後にBMのデータに焦点を当てる。「V + ϕ」が最も多く見られた形式であったが、「V連用形 + ます」も使用されている。そこで、BMは両形式を習得していることがわかる。ただし、両形式が含む、スタイル差のような語用論的な機能には気づいていないようである。特に、(36)と(37)で見られるように、「V連用形 + ます」は積極的に生産しなかったこと、言い換えれば、話し相手の直前の発話に使用された動詞を反復したことが少なくない。

(36)(ボ)[BM-JY(1)]

JY: テレビとかは+

BM: なに+

JY: テレビとかは見る、見ますか。

BM: ああ、見ます。

(37)[BM-JY(2)]

JY: ああいうパーティーは、もっとあった方がいいと。たくさんあった方が。あんまり、いつもはパーティーしませんか。

BM: いやー、しません。

さらに、「V未然形ナイ + ϕ 」以外の形式では「V連用形 + ません」が2回見られたが、用例(37)で観察されるように、その形式の生産も積極的ではないように思われる。

以上観察した「普通体」形式と、「丁寧体」形式においては、場面によってどちらかが使用され、スタイルに対する潜在的な意識が見られる。

3.3. 「非過去形」・「過去形」の併用

本節で特に注目したいのは、肯定・否定過去形が出現すべき文脈において非過去形が現れるということである。それは、その時点でブラジル人話者がまだ過去を表す形式を認識していなかったというより、むしろそれらの形式を完全には習得していなかったと言うべきであろう。要するに、ブラジル人話者が過去を表すのに非過去形と過去形との両形式を併用しており、彼らの中間言語には過去形がまだ定着していないと考えられる。そして、指摘しなければならないもう1つの点は、当該のインフォーマントのように、自然習得が出发点だった人にとっては、「V + ϕ 」と「V未然形 + ナイ」が無標識(unmarked)の基本形であり、いずれのテンスもその無標識の形式で表しつづける傾向があるということである。ここで、自然習得のBNのデータから典型的な例を抽出したい。

(50) [職 [BN-JNa]

BN: 寿司、うん、あ、食べる。2年ぐらい食べる。寿司ね(ん)ま

あ、できません。

BNにインタビューを行った際、上の発話をポルトガル語で言ってもらくと、「日本に来て、2年間ぐらい寿司を食べていたが、今は食べられない」という意味だと判明した。正式な学習をはじめたとはいえ、このような特徴はBI、BA、BM、3名のインフォーマントの日本語にも存在しているように思われる。

さらに、BNは無標識の基本形で過去を表しているが、「2年ぐらい」という、期間を表す補語を用いることによって、テンポラリティを明確にしているということである。動詞のテンス形式が適当ではない場合も、このように、時間副詞、時間的な補語などを使用し、テンポラリティを明らかにしようとする方法が、この段階の中間言語にはよく見られる特徴である。

以下、BI、BA、BMのデータから動詞の基本形で過去を表している用例をひろうことにする。

(51) [ボ BI-JY 学習期間: 7ヶ月間]

BI: (中略) [お正月に] ああ、大体、浜松に行った。

JY: ああ、浜松に行った。浜松って、何があるのかなあ+

BI: ああ、お母さんがいます。

JY: ああ、お母さんがいますね。

BI: もう、もうブラジルに帰った。

(52) BI: えーと、ここの、日本 (ん)、あ、来た時に (ん)、まだ友達
いないです、(ん) Oの友達。

いずれの用例も文脈から発話を時間的に位置づけることができる。(51)では、最後に「帰った」、(52)では従属節の「来た時」が時間の位置づけを印している。

(53) [ボ BA-JK 学習期間: 1年間]

JK: サッカーそうですね。

BA: 日本に、1991年はサッカー、ちょっとめずらしい。テレビはあまり出てない。

今、ほんまにすごいなあ。皆、やってる。

(54) JK: ブラジルの番組というのはブラジルのテレビでやってる番組ですか。

BA: はい、はい。

JK: えええ。そういうのがあるんですか。

BA: ビデオから。ブラジルの人でそんなビデオ、レンタルする。昔は全然ないですね。(ああ) 日本の番組だけ。わからない。だから...

JK: 来た時は、[寒さ]大丈夫でしたか。

BA: 少し怖かったなあ。

JK: 怖かった+

BA: どんな寒く、(ああ) わからない。寒い、大丈夫。

(53) でも現在・過去の区別は、動詞ではなく、「1991年」と副詞の「今」によってわかるようになっている。同様に、(54)では「昔」があることによって、BAが過去の事柄について話していることがわかる。

BMの(55)では、BMが「大阪に住んでいた頃、日本人の友達がいいた」ということがすぐには話し相手に伝わらず、その後の発話で時間の位置づけが明確になっている。

(55)[ボ BM-JY 学習期間: 1ヶ月間]

JY: (中略) [2年前のことについて話している]大阪の時は、日本人の友達とかは+

BM: ああ (ん)、います。

JY: で、その人とは今も会いますか。

BM: 今、会いません。

以上の用例において1つの共通点が見いだせる。それは、動詞の形式上、テンポラリティが標識されていないにもかかわらず、文脈の何らかの要素で発話のテンスがわかることである。

4. まとめ

本稿ではブラジル人話者の動詞の習得・使用状況を全体的に見わたしてきた。話者によって異なる特徴があるとは言え、習得過程および使用上の共通点が多く観察された。データの分析から、次のような点が明らかになった。

- 自然習得の初期段階では、時 (temporality) の表し方が動詞のテンス・アスペクトによって文法化されるとは限らない。動詞を脱落させたり、名詞を並列することが、特にBMの発話に多く現れた。こうした発話は基本的に文脈に頼っており、前後の文脈からその発話の時間的な位置づけがわかるわけである。習得者は文法より語用論的なストラテジーを用いるので

ある。

習得の早い段階から「v ル形 + φ」と「V未然形 + ナイ」が基本形としてインプットされ、ブラジル人話者は過去の出来事もこれらの形式を用いて表す傾向が全体的に多少うかがわれた。学習が進むにつれ、話者はこれらの形式を「Vタ形 + φ」と「V未然形 + ナカッタ」に入れ替えるようになる。

「普通体」と「丁寧体」の使用に関しては、前者が自然にインプットされた基本形であり、後者はボランティア場面で習得されたと思われる。また、BIとBAの場合は、場面や話し相手による両形式の使い分けという社会言語能力の一側面が見られる一方、BMは両形式を用いるにもかかわらず、このような使い分けはまったく見られない。ここでは、正式な学習の有無が主な要因になっていると思われる。

参考文献

- 生越直樹(1991)「韓国人日本語学習者のテンス・アスペクトに関する誤用について」
『現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイスについての総合的研究』鈴木重幸、
工藤真由美他、1988-1990年度科学研究費成果報告書
- 久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- 窪田富男(1982)「学習者の見た動詞の活用 ― とまどいの過程」『日本語教育』
6-47、日本語教育学会
- 渋谷勝己(1997)「旧南洋群島に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」
『阪大日本語研究』9 大阪大学文学部日本語学講座
- ナカミズ・エレン(1996)「日本在住ブラジル人労働者における社会的ネットワーク
と日本語の使用」『阪大日本語研究』8 大阪大学文学部日本語学講座
- Givón, T. (1985). "Function, Structure and Language Acquisition", In

- Slobin, D.I., *The Cross-linguistic Study of Language Acquisition* Vol.2: Theoretical Issues, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Klein, W.(1993). "The acquisition of temporality", In Perdue, C.(ed.) *Adult language acquisition: cross-linguistic perspectives vol.II*
The results, Cambridge U.P.
- Schumann, J.H. (1987). "The Expression of Temporality in Basilectal Speech", In *SSLA*, 9, Cambridge U.P., pp.21-42.

(文学部 助手)